

1. 植物

(1) 静岡県における生育種及び分布の特性

静岡県は本州のほぼ中央にあり、北部の広大な山域と南部の長く複雑な海岸線、わが国の最高峰である富士山や南アルプスの山岳地を持つなど、多様な環境を有している。

気候帯の分布により、植生は標高別に、常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、亜高山針葉樹林、高山植生などが見られる。特に国内の高山帯の分布から、高山植物の中には静岡県を南限とする種類も多い。一方、南方系の植物には静岡県を北東限とする種類も多い。

植物地理学上では東部・伊豆がフォッサマグナ地域に、中部・西部はソハヤキ地域に入るとされ、これらの地域を特徴づける植物が生育している。植物は、維管束植物として種、亜種及び変種を評価対象とした。品種及び雑種は除いたが、分布上、また、遺伝的、形態的に注目される場合は扱った。これまでに県内では4,070種類の記録があるが、近年の新たな分類体系の導入などから、分離・統合の未整理のものがある。

(2) 調査の概要

調査は、現地調査、標本調査及び文献調査を実施するとともに、部会員と調査員以外からの情報も入手した。開始当初の数年は「静岡県希少野生動植物保護条例」の指定希少野生動植物の選定を主目的とし、2009年から南アルプス、富士、伊豆、里山その他の地域ごとに各1~2年かけ、レッドリストのカテゴリーが高いものを中心に静岡県レッドデータブック(2004)時からの変化を念頭に実施した。調査費や調査体制の制約上、本来検討すべきいわゆる普通種などの全県的な調査はできず、RDB改訂としては、十分な調査はできなかった。

(3) レッドリスト種の選定経緯

静岡県レッドデータブック(2004)にリストアップされた663種類のうち、それ以降に情報が得られたものは401種類、1,945点であった。

評価は、それら文献調査、標本調査及び現地調査の結果を踏まえるとともに、部会員等から提供のあった研究成果、知見等に基づき、定性的評価を基本とした。2004年以降の生育量、分布または分類等に関する新たな情報を踏まえ、産地の状況及び産量、過去の記録及び産量、採集圧の大きさや開発の影響等を基に評価した。

(4) レッドリストの改訂で明らかになった点

今回静岡県版レッドリストとして掲載した種類数は次のとおりである。

カテゴリー	2004年 RDB	2020年 RDB	カテゴリー		2004年 RDB	2020年 RDB
絶滅(EX)	5	3	要注目種	現状不明	61	59
絶滅危惧ⅠA類(CR)	38	62		分布上注目 種等	32	27
絶滅危惧ⅠB類(EN)	161	143		部会注目種	87	108
絶滅危惧Ⅱ類(VU)	202	211	合計		663	691
準絶滅危惧(NT)	55	5				
情報不足(DD)	22	20				

今回新規でリストアップしたものは 39 種類である。カテゴリーを変更したものは 42 種類であり、そのうちランクアップは 39 種類、ランクダウンは 3 種類である。

2004 年レッドリストからカテゴリーを変更したものについては、各種解説の表題部分に表記した。また、2017 年レッドリスト発表後に見直した 2 種類については、巻末にその理由を記載した。

(5) 減少の主要因と脅威

植物の生育地・生育数の減少について、その要因を特定することは大変困難だが、調査の結果、推定される主要因として最も多かったものは、247 種類で取り上げられた自然遷移であった。これはレッドリスト 692 種類のうち 36% に当たる。

上記の次に多かった主要因としては、225 種類で取り上げられた森林伐採、172 種類で取り上げられた園芸採取、91 種類で取り上げられた道路建設がある。

2004 年レッドデータブックではラン科植物で採取による影響が大きいとされたが、今回の結果ではその影響がラン科以外でも多くあげられた。また、必ずしも原因特定は難しいものの、シカによる食害の影響が 70 種類で取り上げられたほか、主要因をその他として分類した 112 種類の中には、生育環境の変化が大多数含まれている。

近年、生物多様性への影響として大きく上げられている管理放棄と帰化競合は、今回 33 種類と 7 種類であげられたに過ぎなかったが、最大の主要因とされた自然遷移にも関連する内容でもある。植物の減少をもたらす要因が開発や採取といった直接的な事象以外で深く係わってきていることが示唆される。

(6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

2004 年に絶滅とされたウチワホラシノブは雑種とされたことからリストから除外し、シムライノデは県内唯一の生育地において再確認されたことからカテゴリーを変更した。

里地・里山にある身近な植物の中で減少傾向にある種の見直しにより、絶滅危惧 B 類からランクアップした種が 22 種と多かった。

(7) 考えられる保全対策、今後の留意点

植物に対する保全対策として最も多くあげられたことは、生育地の保護・現状維持であった。確認された個体及びその生育地では、開発に伴う改変等を避けるとともに、人の立ち入りによる踏みつけ、保護と称して行われる過度な移植も生育環境の保持を念頭に留意したい。

また、インターネットで絶滅危惧種を掲載しているホームページなどがみられるが、風景写真からも生育地が特定されるおそれがあるため、情報公開には注意が必要である。

植物を取り巻く今日の環境は、めまぐるしく変動している。今後の保全は、植物個体の保護とともに、可能な範囲で、林床や草地の管理、シカからの食害対策、外来種の駆除などの実施が望まれ、さらに気候変動をとらえた保全のあり方を考えていかなければならない。

(湯浅保雄)

文献及び標本は、植物の解説の末尾 (p.381 以降) を参照。

ハマナツメ *Paliurus ramosissimus* (Lour.) Poir.

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

クロウメモドキ科 Rhamnaceae

[2004 年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 類 (VU)]

1. 種の解説

やや匍匐性の落葉低木。若い木には托葉の変化した刺があり、また若い枝には細毛が密生している。葉は広卵形で長さ3~6 cm、3行脈がある。花期は7~9月。花序は数花からなる。花は径約5 mmで淡緑色。花弁は萼片より短い。果実は倒円錐形の核果で白茶色の毛で覆われる。果頭の周縁に3浅裂した広い翼が発達する。種子は偏円形で紫褐色。

2. 分布

国外では韓国(済州島)、台湾、中国、インドシナに、国内では本州(東海地方、近畿地方、山陽地方)、四国、九州、琉球に分布する。県内では中部に分布する。

3. 生育環境

静岡県植物誌(1984)によると、大正時代初めまで生育していたが、生育地が工場用地として開発されたために見られなくなったという。

4. 生育状況

工場などの造成で生育地が消滅したため絶滅した。

5. 減少の主要因と脅威

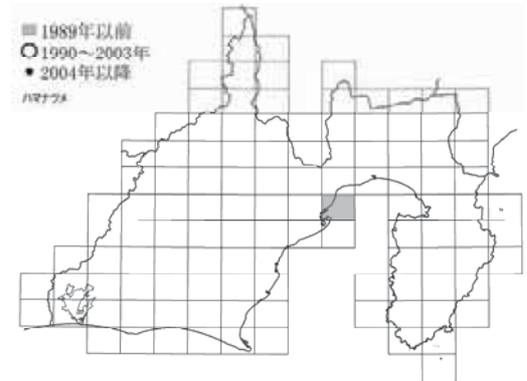
生育地の開発(14)が絶滅の主要因である。

6. 保護対策

生育が再確認されたら、生育地を生育に最適な環境に保全すること。(湯浅保雄)



三重県 2019年9月16日 宮崎一夫



ハマサジ *Limonium tetragonum* (Thunb.) A. A. Bullock

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

イソマツ科 Plumbaginaceae

[2004 年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

越年草。高さ30~60 cm。葉は根際に束生し、長楕円形で長さ8~17 cm、質は厚く全縁である。花期は9~10月。花茎は多く分枝して曲がりくねる。多数の小穂からなる円錐花序を作る。萼は白色、花冠は黄色で長さ7 mm。近似種はないが葉のみの時季ではマツヨイグサやコウゾリナの仲間に見える。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では中部に分布する。

3. 生育環境

入江や内浦及び河口に近い、潮の動きが緩慢な潮間帯の塩性湿地に生育する。

4. 生育状況

1980年代に清水区の記録はあるが、その後は確認されていない。記録地の周辺は一部に湿った砂地が残っているがほとんど護岸され、現在の環境では再生する可能性は少ない。

5. 減少の主要因と脅威

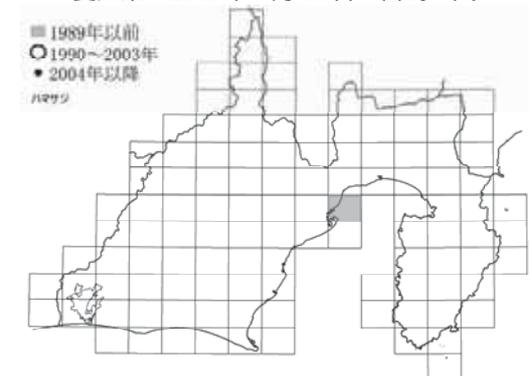
海浜の埋め立てや造成(14)が主要因である。海岸沿いの護岸や道路の開発(24)も脅威である。

6. 保護対策

生育していた記録がある潜在的な生育地を復元保全する。(宮崎一夫)



愛知県 2019年8月13日 宮崎一夫



ミカワシオガマ *Pedicularis resupinata* L.

subsp. *oppositifolia* (Miq.) T. Yamaz. var. *microphylla* Honda

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

ハマウツボ科 Orobanchaceae

[2004年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 類 (VU)]

1. 種の解説

多年草。シオガマガクの変種で、葉は小型、披針形で長さ1~2 cm。花は8~9月に開き、紅紫色で花冠上唇の先が短くつまる。

2. 分布

日本固有変種で、本州(愛知県、岐阜県、静岡県)に分布する。県内では西部に分布し、東限自生地である。

3. 生育環境

日当たりのよい丘陵地の湧水湿地に生育する。

4. 生育状況

浜名湖周辺の記録がある。近年の生育記録がない。

5. 減少の主要因と脅威

湿地開発による生育地の消失(15)や湿地の管理放棄による生育環境の乾燥化や植生の遷移(53)で絶滅した。

6. 保護対策

再発見された場合は、生育環境の管理、保全が重要である。

(内藤宇佐彦)



愛知県 2007年10月22日 宮崎一夫

